









写真: 上から、フランクセンターのマーチンさん、フランクセンター展示品2枚、集合写真、ポリクリニック、ホイリゲ3枚

【フランクセンター】

ウーン大学構内にあるテラスで遅い昼食をとった後、私たちははいよいよフランクセンターに向かいました。それは、マリアーネンガッセ1 (Mariannengasse1) にあり、全てを失ったフランクが戦後1945年から、その生涯を閉じた1997年まで実際に住んでいた家です。さまざまな意味で非常に意義深い場所であることを改めて感じました。今は、こうしてフランクセンターとなり、多くの人々に開放されています。学校の生徒のためのワークショップや、時には小さなコンサートを開くこともあり、ここは出会いの場となり、予防と言う意味でも大切な役割を果たしているそうです。

ここを訪れた私たちをまず迎えてくださった女性は、マーティンさんという方で、私たちのために休暇を2日も早めてウーンに帰って来てくださったそうです。あいにく館長さんにお会いすることはできませんでしたが、彼女の暖かい歓迎の言葉と、冷たい飲み物用意して下さったご親切に感激いたしました。

センターの入り口に入って奥の、窓に面した明るい部屋の壁には、ロゴセラピーの理論と、それを基盤とした、人間学・医学・精神療法・哲学と信仰・教育学・経済と題された6枚のパネル(フランク生誕100周年でつくられた)が貼ってあり、次の間には、フランクの年表が飾ってありました。そのさらに奥の部屋の棚には、フランク、そしてルーカス女史の著作がたくさん並んでおりました。また、世界中で刊行されたロゴセラピーに関する書籍が蔵書として並べられ(中国語やハングル文字のものもありました)、われらが赤坂さんが訳された「人生があなたを待っている」も備えられていました。さらに今回、K.K.先生の「ロゴセラピー入門シリーズ 1. 2. 3巻」も届けられました。

フランクの眼鏡や口述筆記用のレコーダー、メモのぎっしり書かれた本や家族の写真なども展示されていて、フランクという人を身近に感じさせてもくれるのですが、その存在感は圧倒的でした。

かつてはフランク自身がここに住み、苦悩を乗り越え偉大な業績を残していった、まぎれもないその場所にこうして立っている感動を、言葉にすることは難しく、ただ私は、この部屋の窓を見、壁を見、そして床を踏みしめてみるだけでした。

まるで講演を聴いているようだったと、Hさんが仰っていましたが、その後、私たちはフランクのビデオフィルム

を見せていただき、フランクルの姿、声を本当に目近に体験したのです。

ここでは、フランクルの講演DVDや文献・パンフレット等が購入でき、それぞれが自身の勉強のため、日本で待つ学友仲間や学生さん達のために資料を購入して持ち帰りました。これら資料が、また新たな学びを助けてくれることが楽しみです。

【ポリクリニック】

1時間半程の見学予定を終えフランクルセンターを辞した後、歩いて2～3分の所にあるポリクリニック(究極の“職住接近”!!)に寄りました。現在は使用されておらず外観だけの見学でしたが、フランクルの通った同じ道を歩き、多くの患者さんと出会う臨床の場であった病院前に立つことができ、身の引き締まる思いでした。

レモンイエローの美しいその建物は、夕日に照らされ凜と輝いていました。

【ホイリゲでの夕飯】

夕食は、一度ホテルへ戻り、迎えのバスでグリーンツイングのホイリゲへ。

「ウィーンへ行くなら絶対ホイリゲへ！」とどなたかからリクエストがあったとか…。

ホイリゲはその年にできた新酒の地ワインを飲ませる居酒屋。新酒ワインが0.5Lジョッキで饗されるのですから、ワイン好きにはたまりません。

ブドウ棚の下の中庭のテーブルで、心地よい風・バイオリンとアコーディオンの楽団の軽やかな音楽(日本の曲もサービスしてくれました)・大皿に盛られたローストポークやザワークラウトといった素朴な料理…そしてなにより、フルーティーでさわやかな新酒ワインを存分に楽しみました。

おかわりのジョッキワインがいくつも追加で運ばれたテーブルがあったのはご愛敬…。2時間弱の夕食を楽しみ、さすがにとつぷりと日が暮れて、灯りのともり始めたグリーンツイングの街を後にしたのでした。

(Y.N. & M.M.記)